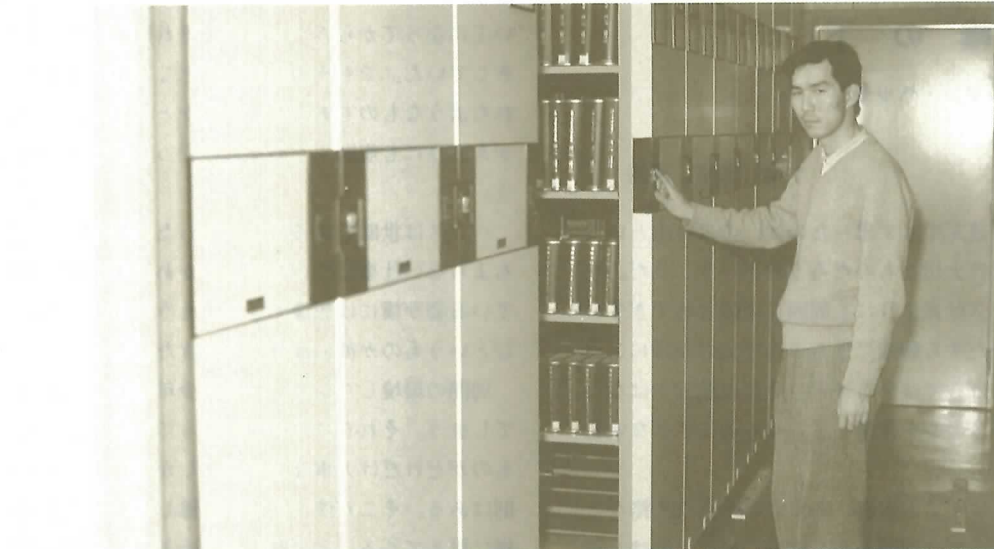


図書だより

〈第22号〉

平成2年3月7日

呉工業高等専門学校
図書委員会



(完成した電動式移動棚)

目次		
〔読書感想文〕		
文学	「車輪の下」(ヘルマン・ヘッセ)	1 M 三宅 清長.....2
	「火垂るの墓」(野坂 昭如)	1 E 山根 誠史.....2
	「路傍の石」(山本 有三)	1 C 岡崎 直子.....3
	「野火」(大岡 昇平)	1 A 新本 敦子.....4
歴史	「日本を震撼させた四日間」(福井 勲)	2 C 末永 宏之.....4
	「今日と明日のおもしろ雑学」(フリーランスライターズ)	2 C 榎藤 和典.....5
	「吉田松陰」(古川 薫)	2 A 阿草田 佳子.....5
	「王妃マリー・アントワネット」(遠藤 周作)	2 A 向井殿久留美.....6
政経	「軍縮の政治学」(坂本 義和)	3 C 高光 哲哉.....7
	「母は枯葉剤を吸った」(中村 梧郎)	3 C 山本 誠二.....7
	「テラスで読む世界経済読本」(日本経済新聞社編)	3 A 佐藤 拓也.....8
	「森が危ない」(NHK取材班)	3 A 山田 真希.....8
〔随想・読書雑感〕		
アメリカの図書館		4 M 石村 晃一.....9
「剣士燃え尽きて死す」(笹沢 左保)		4 E 河辺 一浩.....10
〔私の推薦する本〕		
「物性科学のすすめ」(培風館)		一般科目教官 笠松 義隆.....11
「からだの中の元素の旅」(講談社)		一般科目教官 茶木 正吉.....11
「海軍主計大尉小泉信吉」(文芸春秋)		機械工学科教官 大下 隆章.....12
「ファジ理論の展開」(サイエンス社)		電気工学科教官 加藤 裕一.....13
〔新着図書30選〕		
〔海外だより〕		
美しき西ドイツの村と街		建築学科教官 篠部 裕.....17
〔夜間利用者の声〕		
放課後ちょっと図書館で		4 E 殿川 雅也.....21
時間外開館のおかげで		3 E 吉富 隆.....21
〔お知らせ〕		
「フランク・ロイド・ライト全集 全12巻」一故・清教授ご家族から寄贈一		22
書庫増設が完了		22
時間外閲覧(夜間開館)		22
〔編集後記〕		

読書感想文

文学

「車輪の下」

(ヘルマン・ヘッセ)

1M 三宅 清長

この小説を読んでまず思ったのは、心の自由というもののがどれだけ大切なものだろうかということだ。主人公少年ハンスはあまりにも周囲に束縛されすぎていると思う。ひたすら勉強にうちこんで父の期待にこたえようとがんばってはいたけど、それは勉強ではなく、単に少年ハンスの心を束縛していくものにすぎないと僕は思う。

少年ハンスはとても素直、あるいは正直な性格だと思う。それだけに、周囲からの束縛に耐えて勉強続けるハンスの姿は、なんとなくがまんしているように思った。そういう束縛にがまんし続けたハンスは、とうとうそれに耐えれなくなり見習い工になったが、それはあたりまえというか、しょうがないものだろうと思う。

ハンスはエンマと恋をするが、それはハンスにとっては夢の一時だったのではないと思う。やっと周囲の束縛からくぐりぬけられたハンスは、やはり少しはうれしさがあつたのだろうと思う。しかしそのうれしさの中にも、複雑な気持ちもあつたにちがいないと思う。

規則などそういう束縛しやすいものが自分の周りにもよくあるが、それはやはり集団で生活しているので、守るのはあたりまえなのだが、それは難しいことであって、決して自分達は完全にその規則を守っているとは言えないだろうと思う。自分達でもやはり守れない規則はある。ハンスはその守れない規則、すなわちハンスの心の自由が、周囲から、自分達以上に束縛されていたのだと思う。

人間が社会の中で日々暮らしていく上で束縛されているのは仕方がないことだ。

ハンスは友人もあまりいる訳でもない。彼を慰めてくれるのは自然であつたのではないと思う。彼の性

格からでもそのことがよく分かる。

努力の末に入学できた神学校を去ってから、見習い工としてやっていこうとハンスは頑張り出した。見習い工になってからのハンスは、それ以前よりも生き生きしていた。でもその生き生きとした中にも途方にくれたようなものもあった。なぜかという、それ以前があまりにも規則づくめのものだったからだと思はう。

ハンスは世間を見る目もかわったと思う。全く思いもよらない仕事についたにもかかわらず、彼の頑張っている姿が僕には想像できる。そういう中で人間の喜びというものが彼には分かってきたのだろうと思う。

周囲の環境しだいで、一人の少年の心理が動かされてしまう。それをこの小説は語っていた。自由というもののがどれだけ大事なもののか。しかし自由の中にも規則はある。そこが僕にとっては難しいものだなという様に思えてくる。その難しさを乗り越えていくことが、僕達の年齢では、できなければならないのだ。

「火垂るの墓」

(野坂 昭如)

1E 山根 誠史

この物語は次の文(略)ではじまる。駅の構内で死んだ清太の腹巻のなかから小さなドロップの缶が発見され、それを駅員がほうりなげると、缶の中から小さい骨のかけらがころげだし、それが清太の妹の白い骨である。それから話が神戸の空襲へもどり、そこまでの時間経過をたどっていく構成になっている。

清太というのは、中学3年で戦時中の勤労動員で神戸製鋼所へ通っていて、母は病身、父は海軍大尉で巡洋艦に乗組んだまま、妹は節子というわずか4才の子である。

物語の内容は、神戸に空襲がおきて、そのために病身の母を失い、兄妹二人で生きていかなければならないようになってしまったというものです。それは、今の時代でもわずか14才と4才の兄妹で生きていくことがまず不可能なのに、まして戦時中にそれやって

いくことなどとてもできるようなことじゃないと僕は思いました。けれどもこの兄弟は死ぬまでやってのけたのです。僕はすごく感動して涙が出ました。その反面、戦争というものがとても憎らしく思えました。戦争さえなければおそらく清太の母や父が亡くなることもなく、また、清太と節子が栄養失調症で死んでしまうことがなく、家族で楽しくくらしていけたんだと思うとなんともいえない気持ちになります。「なぜ、何故に！」と。

それからほかに、憎らしく思ったことは、清太の母が死んだ後、遠い親戚の家にやっかいになることになった兄妹が、はじめのころは未亡人のおばさんが二人に親切にしていたが兄妹が母の貯金を使い果たしたために、米が買えなくなると、急に人が変わったように冷たくあしらわれるようになったことです。これほどひどいことはないと思う。兄妹から金をまきあげておいて、それがなくなればゴミ同然のあつかいをするなんて……。

これも戦争の影響からなのかと思いました。戦争は人を殺したり、建物を破壊するだけでなく人間にとって一番大切なもの（他人に対する思いやりの心）までもすきんだものにしてしまうのかと改めて疑問をもちます。

また、この物語を読んで一番印象に残っていることは、清太と節子の兄妹愛のきずながたたく結ばれていたことです。

特に、防空壕での生活は印象に残っている。妹が栄養失調で倒れて自分で起き上がることもできなくなった時、なんとか妹に栄養をつけて元気になってもらおうと、盗みをしてまでも妹につくしたことです。戦時中で人の心がすさんでいるなかなのでとりわけ兄妹愛をつらぬきとおしたことに感動しました。

しかし、その努力もむなしく妹は死んでしまい、清太も後に妹をおいかけるような形で死にました。僕はこの作品をとおして戦争というものは、二度と起こしてはならないことを悟りました。

「路 傍 の 石」

（山本 有三）

1 C 岡崎 直子

この作品を読んで思ったことは、主人公の吾一がど

うしてあんなに「中学校へ入りたい、もっと勉強がしたい」と思っていたかということです。今の私たちから見れば「どうして勉強がしたいのだろう？ おもしろくもないのに」と思う人が多いと思います。しかし、当時の子は小学校を出たらすぐ店に奉公に行ったり働きに出される場合がほとんどで、中学校へ行けるのは店の主人の子などごく一部の金持ちの子だけだったので、吾一にとってもあこがれがあったのだと思います。しかも吾一はいつもクラスで成績が一番で、それだけ努力もしたからほかの人よりももっと行きたかったのではないかと思います。

今では中学校も義務教育となり、中学校へ入るのはあたりまえになっているので、特別うれしいとか、中学校へ行けるというありがたみがないと思います。だから吾一など昔の子から見れば今の子がすごくうらやましく思えると思います。それに吾一や、吾一の友達らはみんな中学校に行きたいのにお金がないせいでつらい仕事をし、それにたえているのに、お金持ちの家の子は勉強はそんなにしなくても学費さえあれば今の子と同じように中学へ行くことができたのです。しかし当時は学業はむだなものとされ、どちらかという到店などへ奉公に行って仕事を身につけるほうが役に立つという時代だったので、中学校というのはいいい反面むだでぜいたくな所という感じも強かったと思います。

でも、お金がなくて学校に行けないのはあんまりだと思います。だけど親も、しかたなく子供を働かせるに行かせていたのだと思います。子供はただ中学校へ行けなと残念に思うだけだが、親は家でお金が工面できないために子供を学校へ行かしてやることもできないのもっとつらい思いをしていたと思います。しかも昔は差別がひどく、どんなに働いても家が豊かにならなかったで、「そんなむだな所へ行かなくても、生活に役立つ仕事を身につけたほうがどんなにか役に立つ」と思っていたんだと思います。

今、私たちは学校へ行くのを当然と考え、また、勉強は必要なものだと考えています。だけどあまりありがたとは思わず、学校へ行けることがそんなにうれしいとも思っていない。しかし、吾一たちの時代には学校へ行ってもっと勉強がしたい、もっと本が読みたいと思っていた人はたくさんいたと思います。そしてそういう人たちがもし学校へ行けたなら他の人以上に、自分からすすんで勉強すると思います。この話

では最後に吾一は恩師である次野先生にすすめられて商業学校に入ることになります。だからきっとそうだったと思います。私たちも勉強できるということをもっとそういう方面から見ていったらと思います。

「野 火」

(大岡 昇平)

1 A 新本 敦子

敗北が決定的となったフィリピン群島の一つ、レイテ島で結核になり、わずか数本の芋を渡されて本隊を追放された田村一等兵「私」、が野火の燃えひろがる原野をさまよい、前途に死しか予想出来ない極限状態の中で、極度の飢えに襲われたあげく、僚友の屍体に目を向けるが、結局は人肉を食べることに踏み切れなかった精神と、「私」の中の神との対話を作者、大岡昇平自身の体験を基にして、えがかれた作品、「野火」――。

今の時代を生きているということは、本当にしあわせだなと思うぐらい、この本は、戦争の悲惨さを表していると思います。戦争によって命を奪うだけではなく、人間の心をも奪い、狂わせてしまうような、そんな気がします。

それとも、前途に死しかないという極限状況の中では、それが普通なのか…？

一番すごいなあと思ったのは、食べ物のことです。――もぎ離し、ふくらんだ体腔を押し潰して、中に充ちた血をすすった。――

――後ろで炸裂音が起った。破片が遅れた私の肩から、一片の肉をもぎり取った。私は地に落ちたその肉の泥を払い、すぐ口に入れた。――

最初の文は、死んだ将校の屍体に食らいついた蛭を食べている場面で、次の文は、僚友が「私」を殺して食べる為に（ノ）手榴弾を投げた時の場面です。

どちらも何とも言えないような、すごく悲惨な場面で、とても考えられません。でもそれが現実におこった事なのだから、ぞっとします。それが必要な行為なのかもしないけれども…。

そして、「私」もその例外ではなく、激しい飢えに悩み、結局、屍体に手をかけようとしています。

――私はまず屍体を蔽った蛭を除けることから始めた。

(中略) その時変なことが起った。剣を持った私の右手首を、左の手が握ったのである。――

結局食べなかった「私」のこの行動を、「私」の中の神が左手によって制する、と描かれているが、なぜ食べなかったのか、そこが一番の問題点だと思います。

その答えは、私には分かりませんが、非常に興味深く読めたと思います。

歴史

「日本を震撼させた四日間」

(福井 勲)

2 C 末永 宏之

歴史の宿題で感想文を書こうとした時、ちょうど中国の歴史に興味を持ちはじめたので、前漢をつかった劉邦の話か、三国志でも読もうかなあと思い呉の図書館に行って、中国の歴代の人物についての小説があったのでこれを読んでみようと思いました。が内容は、やたら漢文は出てくるし、読めない漢字は山ほどでていたといった感じでまったく進まないで再び図書館に行き、題名にひかれてこの本を取って見るとどうもこの本は、二・二六事件のことらしい。宇根先生がたしか二・二六事件についての本を読んどいた方がいいみたいなのを言っていたなあと思い、宇根先生の、この事件はややこしくて難しい事件だという言葉です。――

で、内容はどうだったかと言うと、はっきりいって、難しい字でいろんなことを表現していて完全には理解できませんでしたが、少なくとも二・二六事件に対する自分の思っていたことは、間違いだったことに気づきました。この本を読むまではこの事件は、軍が、武力で政治の実権をにぎり、軍国主義へと導いた事件でこの事件にたいしてあまりいい印象を持っていませんでした。

しかし、この本を読んで見ると国会政治の腐敗にたいする怒りから国をよくしようとした将校が、純粋な気持ちで直接行動をしたとしてこの事件の見方ががらりと変わりました。それにしてもこの話はひどい話で、二・二六事件がおこった当日、中央の軍の幕僚た

ちは、よくやったとばかりに英雄としてたたえたのに、天皇陛下の怒りを知るとすぐに逆賊、反乱軍にされたのである。しかもこの作者によると、数々の、幕僚の誤った行動によってすぐに解決すべきこの事件が長びき、このような大事件にいたったのである。彼らは世間には、とても冷たい目で見られ、自分もいままでそう思っていたのだが、それは完全な思い違いであることがわかりました。士官学校でたての青年将校が、国を救うためと、士官の説くその言葉を信じ、気づいて見たら反乱軍という、死んでも死に切れない恨みがよくわかりました。この小説は一応すべて読んだのですが完全に理解することは出来ませんでした。だけどこの事件に対する見方が変わっただけでもよかったと思っています。

「今日と明日のおもしろ雑学」

(フリーランス雑学ライターズ)

2C 槇藤 和典

嘉永4年の1月3日、ジョン万次郎がアメリカから帰国後、彼は、英語教師として幕府から重宝がられる存在となったようだけど、彼の書いた『英米対話捷徑』では、「ナウバフヘヤ」、「ユー スパーカ エンクレセ」「フハヤ デッチ ユー シー ヒス?」で、最初のが「ネパー・フィア (心配するな)」二番目が「ユー・スピーク・イングリッシュ」三番目が「フェア・デイド・ユー・シー・ヒム?」などのようにアメリカに10年もいたのに、何となくはずれているように思った。それでもそのころは英語を知っている者もいないので日本では標準の英語にされていたんだと思う。単語では、レバ=リバー、ロエン=レイン、アメリカの州では、ノセロ=ニュージャージー、メンセギヤエン=ミシガンのようにとんでもないように訳している、アメリカの田舎の方言を憶えてきたんじゃないかと思った。万次郎の耳には「ニュージャージー」が「ノセロ」と聞こえたかもしれないけど、案外、こんなふうに発音したほうが、うまく通じるんじゃないかと思った。相手のアメリカ人は日本語を知らない、なんぼ10年滞在しても憶えにくかったと思った。

幕末期の日本に、ずばぬけて多くの俊英を輩出した教育機関、適塾を開いた緒方洪庵は意外に、自分から

教えることは、ほとんどしなかったというので驚いた。門人は、勝手に自分の勉強をし、わからないことがあった時だけ洪庵にききに行くような形で、それなのに、門人の一人一人をよく見ていて、それぞれの希望と能力が生かせるように就職の世話をしたり、推薦状を書いたりしたようだけど、この方式で俊英が出たということは、洪庵の人格的影響力がかなりすごかったんだと思います。

もう一つの機関、吉田松陰の松下村塾には高杉晋作、伊藤博文、山県有朋など、倒幕の志士や、後に政府の要人になった者が多く、適塾の方は、大村益次郎、橋本左内、福沢諭吉など、学問・教育・行政・軍事・経済など、多種多様な分野で活躍した人が多い。これは松下村塾が、尊王攘夷、倒幕という革命運動の志士を育成する思想教育の場であつたのに対して、適塾は、近代的な意味の科学教育・語学教育などを推進したんだと思います。

「吉田松陰」

(古川 薫)

2A 阿草 由佳子

吉田松陰が生きた時代、それは幕府が激しく変貌する大変な時期でした。とろい私には、とうていついてゆけそうもないスピードです。

でも、後世に名を残す人は違います。松陰様は、まさに、この時期に生まれるべくして、生まれた立派な人なのです。私から見ると、絶対この世の人ではありません。だって信じられますか? 数え年9歳から、少年軍学者として活躍して、11歳の時には藩主の前で、講義さえしてしまうなんて…。しかも、その講義の内容は、満17歳の私には、ちんぷんかんぷんなのです。それに、彼の知識を吸収する力、それこそ砂地に水がしみこむ様に、次々と書物を読破してゆきます。お暇な方は、松陰様になりきって、1カ月45冊の本を、読んでみることをおすすめします。

しかし、頭の良さ、講義のうまさだけでは人を引き付けることはできないと思います。彼には、羨ましいことに、謙虚な心と、正義感、新しい事に敏感に反応する能力が備わっていたのです。

30歳で死ぬには、早過ぎたと思わずにはいられませ

ん。その死の、いきさつを読むと、松陰様も人間だったのか…と気付かされる程、まぬけです。それも、早熟し過ぎた者のさだめでしょうか。

でも、彼は30年、無駄なく時間を過ごした人だと思います。自分自身に素直で、愛国心の強い人物、それが私の感じた松陰像です。

松陰様と同じ位、松下村塾は有名です。彼の、世界の情報を得る度に起こる、日本への不安が、松下村塾に力を入れる原動力になったのではないのでしょうか。松陰様のまいた、種を持って飛び立った門下生が、その後、日本を創り上げていった…。全てが、松陰様の計画通りになりました。

でも、私は彼に聞きたいのです。世界を知り続け、日本を愛し続けたあなたですが、自分を見詰めたことがありますか？と。小さい時、子供らしさがないなんて、すごく寂しい気がします。自分自身のことで悩んだり、つまらない事で反抗したり、そういうのが人間だと思うのです。あなたがもし、そんな人間臭さを持っていたのだとしたら、私は今以上尊敬することができでしょう。

「王妃マリー・アントワネット」

(遠藤 周作)

2A 向井殿 久留美

この本のカバーに「苛酷な運命の中、愛と優雅さを失うまいとする悲劇の王妃の生涯を…」と解説があります。でも、私はこの本を読んでみて、マリー・アントワネットに「悲劇の王妃、という言葉は似合わないというか、足りないという気がしました。違うと思いました。

確かに客観的にみると、彼女の人生、特にタンブル塔という牢獄での生活や、最期の時は悲劇です。国王であった夫は処刑され、生きる支えであった息子とも、引き離されてしまいました。美しかったブロンドの髪も、老女ようになってしまいました。そして、最期は断頭台でした。でも、それはあくまでも、私たちから彼女の生き方に与えた言葉であって、彼女自身の生涯を、悲劇というには考えなかったと思います。また悲劇と語られることは、彼女にとって不本意なことだと思います。

かねて、彼女は友人に「優雅こそ私の身上」と語ったそうです。そんな彼女が牢獄での自分の生活を、不幸だ、惨めだ、悲劇だ、と認めるということは、^{イコール}今の自分を、優雅でないと認めることにもなるのではないのでしょうか。そんな屈辱的な妥協を、彼女の誇りは許すはずがないと思います。また、少女時代、ぜいたくやりたい放題のころの彼女であったら、「ああ、私はなんてかわいそうなの」、と悲劇のヒロインになりきっていたでしょう。でも、ここで彼女は母として妻として、王妃としての強さをみせます。幼いころからの気の強さ（勝ち気さ）と違う強さ、です。タンブル塔での生活は、悲劇なんて弱々しい言葉では、表わせないと思います。

以上が、私がマリー・アントワネットに、悲劇の王妃という言葉が似合わないと思った理由です。しかし、ここまで書いておきながら、悲劇という言葉の代わりに、もっと彼女に似合う言葉を見つけだせないでいる私です。ごめんなさいマリー・アントワネットさま。もっとたくさん、あなたのことを勉強したら、あなたのことを知ったら、王妃という言葉の前に、素敵な言葉を見つけ出せると思います。待っていてください。

○「図書室では静粛に」

○「読んだ本はもとの位置へ」

○「帯出期間を守ろう」



○「図書室での飲食はやめよう」

○「脱いだスリッパはゲタ箱へ」

政経

「軍縮の政治学」

(坂本 義和著・岩波書店)

3C 高光 哲哉

毎年8月6日が近づくと新聞やテレビでさかんに平和に関する記事やドラマ、映画を流しています。ぼくもいくつか目にした中からの感想として、あの時代からすでに40数年たって、現代の兵器はとてつもなく進化しています。昔の事件のような感じがしてきます。たった40数年間のうちにどうしてここまで戦力が上がったのでしょうか。

第二次大戦後、米ソ間の対立や不信で軍拡が進んできたが、それには政治的、経済的な面も複雑にからみ合っていたのです。

まず第一に、米ソをはじめとする軍事的先進国には「軍産複合体」といわれる権力組織があり、それが近代兵器の開発・実験・生産を進めているのです。

第二は、軍事力により、国家間での強い発言力を得ようとする、いわば脅しのような目的で進められてきました。

第三は、軍拡が一国の中だけでなく他国にまで手をひろげているという事実から見るができます。先進国から他の国へ軍事力を流すことによって同盟を結び、先進国に有利な形が作られます。これによって軍事力を受け入れる側は、軍事的従属だけでなく、政治的少なくとも技術的従属をしなければならなくなります。

第四は、インド、イラン、イラク、中国などで国内の抑圧的な政治体制を維持するために国家自身が進めているという一面もあります。この間の中国の事件はまさにこれにあてはまります。

以上の四点が、戦後の世界における軍拡が行なわれた理由でしょう。これら四点が複雑にからみ合っているのだから、それを防止しようとすると難しそうだが、一つのポイントだけでも解決できれば、かなり軍縮につながると思います。せめて、日本の軍拡だけは防がなければなりません。

「母は枯葉剤をあびた」

(中村 梧郎著・新潮社)

3C 山本 誠二

ベトナム戦争のとき、「枯葉作戦」というものがあったことは、知っていました。ジャングルにひそむ解放勢力を絶滅させるためには、まず、ジャングルを丸坊主にして、見通しを良くすること。そのために、ジャングルを枯らせる「枯葉剤」を、低空の飛行機から、アメリカ軍は撒いた。それから、食糧を絶つために、田や畑の食糧地帯にも撒きました。僕は、それはほんの1、2カ月の短期間だと思っていた。それが、考えてもいなかった10年間も撒き続けられた、と知って、僕は身の毛がよだつ思いがした。量にすると9万1千トンの毒薬が撒かれたのである。それによって多くのベトナム人達が餓死した。戦争が終わり、平和が来た、と思ったのも束の間で、ドクちゃん、ベトちゃんのような癒合体双生児、無脳症、水頭症、巨頭症、無眼球症、唇裂、口蓋裂、臍帯ヘルニア、脊髄瘤、あざらし肢症、内反足、外反足、合指症、といったさまざまな障害児が生まれてきたのである。僕はこれらの子供達の写真を涙なしに見ることができなかった。

ベトナム戦争とは、一体何だったのだろうか？ ベトナム戦争の解釈はいろいろあるが、ベトナム戦争は、人類がかつて経験したことのない化学戦争であったのではないだろうか。それらの整理はこれからではないだろうか。

現在でも、ベトナムでは障害を持った子供たちが生まれ続けていると聞く。ベトナムではこれらの子供たちに十分な救いの手を差しのべる余裕がない。だから私達日本人などが、少しでも援助すべきではないだろうか。ベトナム戦争のことは、決して過去のことしないで、みんなの心に書き留めておいてもらいたい。



「テラスで読む世界経済読本」

(日本経済新聞社編・発行)

3A 佐藤 拓也

日本産業界では早くからライバルとして認識されてきたNIES（新興工業経済群）と呼ばれる韓国・香港・シンガポール・台湾は、一人当たりGNPでは日本の4割以下だが、輸出額の全世界に対するシェアは西独（12.5%）、米国（10.6%）、日本（9.8%）に次ぐ。つまり小さい国内市場の代わりに輸出により目覚ましい発展を遂げたといえる。今や消費者にとっても身近な存在となった。

ところが慢性的な米国貿易赤字の改善を妨げている原因の一つに、NIESの対米依存という問題があると思う。実際、中国・香港を除く最大の輸入相手は日本で、自動車制御部品、半導体が主な品目。その後加工してこの車・電子機器は米国の市場へ送られる。よって米国へ輸出すれば日本からの輸入も増える—という貿易構造といえるかもしれない。

次にNIESの成長理由を考えてみると、'85年9月に開かれたG5（先進五ヶ国蔵相会議）が一つの転機となったといえよう。これ以降円高・ドル安が定着していく中、ドルにリンクしているNIESの各通貨は対円・対欧州通貨レートで大幅に下落し、輸出競争力を強めた。NIES通貨が円に対して相対的に弱くなっているのは、日本に対する輸出競争力がついた一因といえる。日本を軸にアジア地域の製品間の分業を推進し、米国に代わり日本がNIESの輸出受け皿の役割を果たすことが、将来の国際貿易を発展させる上で望ましいのではないか。

NIES成長の他の理由として、途上国は技術面・政策面においてこれまでの試行錯誤が不必要で、技術面だけ先進国から移転すれば安価な労働力を利用して急速に発展できたと考えられる。それにしても、非常に速い展開で前進している。

ブッシュ大統領は就任演説で、「新しい風が吹いている」と変化する情勢を表現している。社会主義国が経済改革の過程で、資本主義の市場原理を導入しようとするなど確かに新しい動きがある。こうした多くの動きは新聞・テレビで報道される。実感したのは、そ

の高速回転故に全体像をとらえ難い場合があるが、ある程度の歴史的流れを把握することが大切ということだ。

「森が危ない」

(NHK取材班著・日本放送出版協会)

3A 山田 真希

酸性雨とは、主に硫黄酸化物や窒素酸化物などの空気中の大気汚染物質が雨とともに地上に降り注ぐ事である。それにより川や湖の水を酸性にし、森林を枯らしたり湖の生態系に大きな被害を与える。これは一般に知られている被害である。私もこの本で初めて知ったのだが、酸性雨で古い石造りの建物でさえ溶けてしまうのだそうだ。あのかたい石が雨に当たって溶ける—というのだから恐ろしい。と言うより考えられない。しかし、実際にこんな事があるのである。

酸性雨による最も深刻な被害を受けているのはノルウェーやスウェーデンである。スウェーデンでは八万五千もの大きな湖のうち、一万八千が酸性化しているらしい。しかもこの被害の原因となる汚染物質のほとんどが遠くの国からやって来る—というのだからたまったものではない。酸性化した死の湖は有機物の腐敗や分解が進まない為、透明で光り輝く宝石のようらしい。不気味な程きれいというのはやはり何かあるという事なのだろう。酸性化した湖を中和する為に石灰をまくのだが、雨や、森林からの小川の水などによって再び酸化される。この小川の水—というものは木の葉や幹に付着している乾性の酸性降下物が雨で流されたものであり、レモンジュース並の酸性度—というからすごい。

西ドイツのシュバルツバルトと呼ばれる森は西ドイツ最大の森である。トウヒやモミを中心とした人工林で占められているが70%以上の木に被害が出ているという。これらの被害は酸性雨によるものだが、湖の魚などとちがひ、間接的なものである。つまり土が酸性化することにより木に必要な養分が土から流れてしまうことから起こるのである。と言っても、はっきりそれが原因とは言いきれない。いくつかある説のうちの一つである—だけなのだ。私も多数の人と同じく酸性雨によるものだと思う。この調子で森の木が枯れていったら私達は生活できないだろう。建物については木造

でなくとも良いが、コンクリートの型枠がいる。まあこんな物は代用品があるだろう。しかし木など植物以外に二酸化炭素を酸素に換えてくれるものはあるだろうか。酸素は理科の実験であるように、作ることはで

きる。二酸化炭素はどうすればいいのか。木や魚などと同様、人間さえも住めなくなる。それも近いうちに。その原因は酸性雨だけではない。早くなんとかしてほしい。

随想・読書雑感

アメリカの図書館

4M 石村 晃一

僕はカリフォルニア州立大学のノースリッジ校という所で半年間勉強した。この学校の規模はアメリカの中では中規模のものだったが、日本の大学と比較すれば、それは最も大きい規模の部類になると思う。(有名なU.C.L.A.は、学校の中に山や川があり、学校の中を移動するのにさえ自動車が必要な程の広さだった。)

ノースリッジ校は、総合大学(University)で、その学校の中で何でも学べるという感じだった。学科数だけでも50を超え、単位の種類は2000~3000はあった。

1つの学校でそれだけの種類の勉強ができるのだから、その助けとなる図書館も大した規模のものだった。学校には図書館が2つあり、2つとも6階建てのビルで、そこには分野別に分類された本がずらりと並べてあった。

各フロアには学生が集まって勉強する為の大きい机が数ヶ所にあり、又個人用の小型の机も数多く設置してあった。又、学生が集まって討論する為の discussion room や学生がレポートをまとめる為に利用する個室など多くの部屋があった。

1階には図書の案内をしてくれるカウンターが勿論あったが、それとは別に、図書の検索用のコンピュータも設置されていた。そして一般の計算用のコンピュータもその図書館の中には100台以上あり、学生は自由にそれを使う事ができた。

蔵書量は数10万冊あり、マイクロフィルムもやはり数万枚あった。最初は何をするものか分からなかったのだが、このマイクロフィルム投影用のオーバーヘッドがかなりの数、あちこちに設置してあった。

学生はいろいろな理由で図書館に来ていたが、そのうちの数人は、図書館に昼寝をしに来ていた。日本人は図書館でそんな事をするのは不謹慎と思われるかもしれないが、そこはやはり国の違いだ。その図書館の中で最も眺めのよい場所には柔らかいソファが多く置いてあり、ここは昼寝のメッカだった。

更にこの学校では、学生が図書館で、よりリラックスできる様に、VTRや音楽鑑賞用機器があった。そしてその階のカウンターでは学生証を提示するだけで学校の所有するソフトウェアを自由に借りることができた。ソフトウェアは勿論学習用の内容のものもあったがそれを借りる学生はあまり居らず、ほとんどの学生は、音楽のレコードやCDを借りたり映画を借りたりしていた。

この学校において図書館は、ただ単に勉強する為だけの場所ではなかった。そこに集まる学生は様々だった。そこに来て自由に自分のやりたい事をやっていた。しかし何をするにしても真剣だった。僕がアメリカの学生を見て思ったのは、めりはりのある生活をしているという事だった。しかし、彼らに言わせれば無駄な時間を過ごす事は、彼らの合理主義に反するわけで、彼らがその時々を精一杯に過ごすのは、至極当り前の事だった。

アメリカの大学生は、日本の大学生と比べるとよく勉強するという様な事を聞くが確かにその通りだ。先に言った無駄な時間を過ごしたくないという気持ちもあるだろうが、それよりも何よりも山のように出されるレポートもその理由だ。

僕もここで広告のクラスを取っていたが、その時に出されたレポートの内容は、まず1ヶ月間株式市場の変動を調べて、変動の大きかった会社を選んで、そしてその会社が一体どんな広告を行なったかを調べてレポートするというのがそのテーマだったが、この為僕は毎日図書館に通いつめる事となった。

アメリカでは、その図書館が24時間開いているというのは大して珍しい事ではない。僕の行っていた学校も朝8時30分から夜中の2時まで開いていた。学生がいつでも、勉強したいと思った時にいつでも利用できる様にする為という理由だ。

アメリカの学生は学校で勉強する。家まで帰って勉強する学生はあまりいない。彼らにとっては家はくつろぐべき場所であって勉強する場所ではないのだ。だからこの様に、いつでも利用できる図書館が必要なわけだ。有名な学校にはそういう風な図書館が必ずあった。だから、学生はいつでも自分のペースで勉強することができる。

この事が、僕がアメリカの図書館を見て感じた事だ。

「剣士燃え尽きて死す」

(笹沢 左保著)

4 E 河辺 一浩

この本は新選組・沖田総司が主人公である。沖田総司といえば両親も無ければ妻子も無い労咳を抱えた天涯孤独の剣士として知られている。

物語はまだ会津藩預かりの新選組結成半年後から始まる。新選組幹部内に芹沢派・近藤派による派閥争いがおこり、近藤派の中心人物の近藤勇は総司と土方歳三に命じて芹沢派を次々と斬殺していく。そうして近藤体制ができあがる。

新選組における沖田総司の天然理心流の剣には絶大な信頼があった。そのため短期間に多くの人斬りを命じられ、実行した。しかも暗殺やほとんど無抵抗の相手を斬ることが多かった。

ここで総司がそれを新選組の使命に燃え、むしろ生き甲斐として人斬りをしたならば私はとても彼に共感などできなかったであろう。しかし、それは違った。

総司は過去、自分が誤って斬ってしまった武家の娘・千鶴の形見の懐中鏡に呟く。「また、ひとり斬った」…。また、その千鶴の許婚者である尊王派の宮川亀太郎をも土方の命令で斬る羽目になった時、新選組に対する絶望、局長の近藤勇への不信が募っていく。

沖田総司は性格は至って明るく冗談ばかりを言ってお人を笑わせ、寺の境内で子どもとよく遊んでいたとされているが、この明るさはあくまで仮面であった。

総司は自分一人の時とそうでない時の二つの顔を持っていたのである。孤独な人間というものは、人前に出るとわざわざはしゃいで見せるものだ。

そして総司は宮川を斬る際、江戸へ帰してやりたいと宮川に頼まれた儒者の娘、麻衣を義理と人情によって引き受ける。ところが江戸への旅の途中、総司が少し目を離れた間に浪士ふうの侍に無礼討ちによって斬殺されてしまう。総司には麻衣を斬殺した犯人は分らない。それ以来総司は生ける屍となった。

その後、新選組は幕府直参となり、幕府の尖鋭部隊となる。これに反撥した隊士は新選組から分離して高台寺党を結成する。どうも新選組では常にこのような内部闘争があったようだ。

やがて鳥羽伏見で薩摩、長州、土佐の藩兵と幕府軍との開戦。総司は新選組といっしょに江戸へ退却する。すでに労咳に体中をむしばまれている。人斬りに疲れてもいた。江戸で病床に就く日々を送らなければならなかった。もう自分が長くないことを充分知っていたのだろう。

ある日、麻衣を斬殺した犯人を偶然知った総司はその相手を斬り倒した。総司の最後の人斬りだった…。

人間・沖田総司。必殺の剣が宙を舞い、閃光となって落下する。沖田総司の幕末の青春に感銘を受けた一冊だった。

○「図書室では静粛に」

○「読んだ本はもとの位置へ」

○「帯出期間を守ろう」



○「図書室での飲食はやめよう」

○「脱いだスリッパはゲタ箱へ」

私の推薦する本

近角 聡信編

「物性科学のすすめ」

(培風館)

一般科目教官 笠松 義隆

本格的な理工学書を読む前に、一般向けの教養図書でまず勉強しておこうと、科学評論家と称する人達によって書かれた入門書を読んでみたが、何か物足りないとか、比喩がかえって解りにくいなどの不満を感じた学生も多いと思う。

数多くある科学教養書の中でも本書は別格である。何しろ、東京大学物性研究所の10数名の教授陣達によって、その専門とする学問をいかにやさしく解説するか競って書かれたものだからである。従って、その内容は信頼性が高く、平易な表現の中にもかおり高いものが感じられる。

興味を持ってもらえそうな内容の一部を紹介しよう。ヘリウムは、大気圧下において絶対零度まで温度を下げて、液体のままである唯一の物質であるが、超流動という奇妙な性質を示す。ピーカーで汲んでも、すぐに、したたり落ちるというのである。もちろん、ピーカーに穴があいている訳でなく、壁をはい上がって外に抜け出すから不思議である。逆に、空のピーカーを液体ヘリウムの中へ押し込めると、壁をはい上がって中にたまるという。研究者は、極低温、高圧力、強磁場など極端条件の世界を作り、物質の持っている性質を見極めようと努力している。室温では熱振動によって打ち消されていた原子同志の磁気的な作用が、極低温にすることによって現われて来るという。現在の極低温技術は、絶対零度まであと 0.001度と迫っている。圧力の方では、地球深部の物質を実験室で合成できる10万気圧が得られている。瞬間でよければ、1000万気圧まで得られるが、火薬の爆発によるものなので、装置も瞬時にして破壊されることを覚悟せねばならない。強磁場の発生にも火薬が使われることがあるが一般的ではない。鉄芯入りの電磁石で発生させることができる磁場は数テスラでこれは地球磁場の約10万倍である。これ以上の磁場を発生させる場合、鉄芯がかえ

って邪魔になるというから面白い。空芯入りで瞬間に100万アンペアもの電流を流して電磁石が発生し得る最大磁場の100倍以上の高磁場を発生させるという。それでも研究者は物足らずなく、前人未到の分野を開拓し続けているという。危険が多少あろうとも。

本書の続編として「続——」、「続々——」が出版されている。工学系の学生はいつかは物性科学の勉強が必要となろうが、その時、本シリーズは良き指針書として十分に満足できるものと信じる。

吉里 勝利著

「からだの中の元素の旅」

—微量元素のはたらきを探る—

(講談社)

一般科目教官 茶木 正吉

最近、最後の秘境「人体」その実像に迫る大スペクタクルとしてNHKより驚異の小宇宙「人体」(全6巻、別巻2)が出版され好評である。その生命体中存在する元素は、29種の生元素からできていて、複雑な営みが行なわれている。炭素、水素、酸素、窒素各元素が核酸、タンパク質、糖質、脂質と生命の骨格を作る。また生命活動に必要な微量元素がどのような機能を果たし、どのようにしてからだからすてられていくか。たとえば、亜鉛やニッケルが不足すると、私たちの生殖機能は低下する。有害なカドミウムでさえ、まったく存在していないと成長を妨げることになる。反対に、酸素だって存在のしかたによっては有毒化するなど、多量なものからマイクログラムのオーダーまで、特に微量金属元素に注目して、それらが摂取されてから排泄されるまで、どんなはたらきをするかをよく説明されている。生命を構成している元素の分類などを参考までに表に示します。



生元素の量的分類

有機物を構成している多量元素	酸素(O), 炭素(C), 窒素(N), 水素(H), リン(P), イオウ(S)
多量金属元素	ナトリウム(Na), カリウム(K), マグネシウム(Mg), カルシウム(Ca), 塩素(Cl)
微量金属元素	鉄(Fe), 亜鉛(Zn), 銅(Cu)
極微量元素	フッ素(F), ヨウ素(I), セレン(Se), ケイ素(Si) ヒ素(As), ホウ素(B), マンガン(Mn) モリブデン(Mo), コバルト(Co), クロム(Cr), バナジウム(V), ニッケル(Ni), カドミウム(Cd), スズ(Sn), 鉛(Pb) (ゴシックは金属元素)

生元素テーブル その1

元素	記号	含有食物と平均的摂取量	1日の必要量	体重70kgの人の体内存在量	体内のどこにあるか	不足した場合の関連する病気など(動物も含む)
リン	P	1300mg	750 mg	680 g	骨と歯(80%) 核酸、脂質、タンパク質	腸吸収障害
イオウ	S	卵	12	100	毛髪、ツメ	グルタチオン、システインの合成不全
ナトリウム	Na	通常食物	1500	70	体液	筋肉けいれん、頭痛、吐気、下痢、アジソン病
カリウム	K	通常食物	2000	250	体液	頻脈、心拡張
マグネシウム	Mg	米ぬか、海産物	350	42	骨(70%)	血管拡張、充血、けいれん、不整脈
カルシウム	Ca	牛乳、小魚	1(g)	3(kg)	骨(99%)	くる病、骨軟化症、テタニー症
塩素	Cl	?	3000	115	体液	?
鉄	Fe	野菜、海産物	12	6	ヘモグロビン、ヘムタンパク質、ミオグロビン、フェリチン	貧血
亜鉛	Zn	穀類、豚肉6~16mg	12	2	眼の脈絡膜、精子、毛髪	各種皮膚症、生殖力低下、免疫脱毛、味・嗅覚低下
銅	Cu	牛肝臓、穀物	2	100(mg)	肝臓、脳、心臓	貧血、骨異常、毛髪異常、脳障害
フッ素	F	2mg	3	?	歯のエナメル質、骨	Ca、P、ビタミンDの代謝異常、歯、骨発育抑制
ヨウ素	I	海産物0.2mg	150(μg)	15(mg)	甲状腺	甲状腺障害

生元素テーブル その2

元素	記号	含有食物と平均的摂取量	1日の必要量	体重70kgの人の体内存在量	体内のどこにあるか	不足した場合の関連する病気など(動物も含む)
セレン	Se	マクロ、カニ、ダイズ120~130μg	0.1 mg	21 mg	腎臓、肝臓	筋ジストロフィー、ガン、肝臓壊死、克山病(うっ血性心筋症)
ケイ素	Si	?	?	?	毛、骨	結合組織・骨形成不全
ヒ素	As	海産物	?	?	腎臓、肝臓	生育阻害、生殖機能低下
マンガン	Mn	4mg	3	14	腎臓、肝臓	骨、生殖、中枢神経機能低下、成長遅延
モリブデン	Mo	0.15mg	0.3	?	キサンチン酸酵素など	成長・生殖機能低下、虫歯になりやすい
コバルト	Co	20μg	20(μg)	1	肝臓、腎臓、骨	悪性貧血、メチルマロニ酸尿
クロム	Cr	2mg	0.1	3(g)	脾臓、明果、腎臓、肝臓	耐糖低下、成長、生殖低下
バナジウム	V	海産物(ホヤ)0.1mg	?	?	?	成長、生殖不全
ニッケル	Ni	0.4mg	0.06	?	核酸	生殖低下、グリコーゲン代謝低下
カドミウム	Cd	貝類	?	?	?	成長阻害
スズ	Sn	3mg	?	?	?	成長不分
鉛	Pb	マクロ、穀物	?	?	骨	成長不全

人間が生きていくのに、何気無しに食事をしているが、無機質は私たちのからだの調子を整え、機能を最大限に発揮してくれる栄養素です。毎日の食事をもう一度見直して、過不足なく色々とバランスよく摂取することが大事と思う。あまり神経質にならぬように、ぜひ、この本を読んでいただき理解されることを望みます。

小泉 信三著

「海軍主計大尉小泉信吉」

(文芸春秋)

機械工学科 大下 隆章

著者は慶応義塾の塾長までされた人ですが、長男、信吉(しんきちと読む。著者の父は信吉(のぶきち)ですからよほど父を尊敬され、子供に夢を託されて同じ文字の名前を付けられたのでしょう)が昭和16年の春に慶応義塾を卒業して、昭和17年10月南太平洋で戦死するまで、著者が信吉に送られた手紙、信吉から家

族に送ってきた手紙を中心に小泉家の人々も紹介されています。

書名の海軍主計大尉と言葉を聞くと戦争を連想しそうですが、決してそうではなく、脈々と流れる父の子に対する愛情、子から親へ限らない尊敬、家族、家への思慕の気持ちが読み取られて心の温まる書と想います。最近の科学技術の進歩は余りにも物質偏重の生活になって、ともすると精神面を忘れてしまいそうです。が、このようなときに自分を振り返って見るのも良いように思います。

以下は本書の中の一文中、昭和16年12月の手紙です。「君の出征に臨んで言うておく。われわれ両親は、完全に君に満足し君をわが子とすることを何よりの誇りとする。僕はもし生まれ替わって妻を撰べと言われたら、幾度でも君のお母さんを撰ぶ。同様に、若しもわが子を撰ぶということが出来るものなら、われわれ二人は必ず君を撰ぶ。人の子として両親にこう言わせるより以上の孝行はない。君はなお父母に孝養を尽くしたいと思っているかも知れないが、われわれ夫婦は、今日までの24年間に、凡そ人の親として享け得る限りの幸福は既に享けた」。著者の幸せな家庭の様子が想像されます。

菅野 道夫著

「ファジィ理論の展開」

— 科学における主観性の回復 —

(サイエンス社)

電気工学科教官 加藤 裕一

計算機技術に象徴される今日の科学技術の発展が我々に単純労働からの開放、時間の節約等、便利さや快適さ等を与えてくれる一方で、しばしば“気がきかない”、“いらいらする”といった精神的ストレスを与えている事も事実である。例えば、計算機のプログラム（計算機への人間からの命令書）を作成する上で、“O（オー）”と打つべきを“0（ゼロ）”とキーを叩いたつまらぬミスのために何時間も思い悩んだり、“少しは気をきかせろ”と機械に言いたくなった体験を持つ学生諸君も多いと思う。

ここで今日の科学技術の発展をもたらしたものは何であったか振り返ってみる。本書によるとその回答は、

哲学者デカルトの思想を源泉とする近代合理主義であると述べている。即ち、これまでの科学方法論は、まず、(1)明らかでないもの（例えば、主観的なもの・曖昧なもの）を一切排除する；(2)確実なデータのみを集め分析し要素に分ける；(3)その要素から全体を構成する；(4)構成後、思考にあやまりがないか吟味する；といった4つのプロセスから成っている。私自身、これまで科学・工学を学んできた者としてこのような客観的思考法に慣らされてきたように思う。

しかしながらその一方で、芸術等に対する人間の反応は個性的であり、主観的であり、曖昧である。対象によっては人間は、常に曖昧さを排除し合理的に思考し判断しているとは決していえない。むしろ機械には模倣できない、人間の本質的存在性と結びついてこのような個性・主観・感情等、曖昧性のある領域があるときえ思える。これまでの客観的方法論によって科学や工学を行なえば行なうほど、この方法論では捉えきれない領域が明確に浮び上ってくるであろう。

人間疎外の科学・工学を行なうのであれば話は別であるが、人間を中心とした科学・工学を行なうのであれば、人のもつ上記主観性・曖昧性を科学的、工学的に扱う方法論が必要となろう。本書は、その一方法論として「ファジィ」概念の提唱を述べている。ファジィ理論は“曖昧さ”と“主観”等をどのように表現するのか、またファジィ理論によってどのような科学・工学が生まれようとしているのか、是非一読してもらいたい。

○「図書室では静粛に」

○「読んだ本はもとの位置へ」

○「帯出期間を守ろう」



○「図書室での飲食はやめよう」

○「脱いだスリッパはゲタ箱へ」

新 着 図 書 30 選

〈人文・社会〉

◇石ノ森章太郎著

「マンガ日本の歴史」(中央公論社)

本シリーズは、日本の弥生時代＝稲作の始まりから明治時代の自由民権運動が高まり近代国家が形成されるまでの歴史を、全48巻で、しかも「マンガ」というわかりやすい手法で描いたものである。巻末には、服装、家具、インテリア、建築の歴史を毎号解説。(推薦大林)

◇黒羽清隆〔ほか〕解説

「写真記録 日本の侵略：中国・朝鮮」(ほるぷ出版)

戦争体験は時の経過と共に次第に薄れて行く。しかし本書は、日本軍がかつて中国や朝鮮半島に侵略して行った虐殺等の行為を、数多くの写真や記事で紹介してくれる。(寺本記)

◇草柳大蔵著

「特攻の思想一大西瀧治郎伝一」(文芸春秋)

特攻生みの親は大西瀧治郎中将とされている。が、たった一人の思想・心情だけで、このかってない自殺戦術を執行できたはずはない。「送られた側の心理」からでなく「送った側の論理」で特攻を追及した書。(宇根記)

◇脇坂 昭著

「野球はベースボールに勝てるか」(学生社)

本書は、日米の野球を通して見た日米比較文化論である。著者は、日本の野球は「野球」であり、米国の野球は「ベースボール」であるとし、両者が本質的に異なるものと考えている。日本での内野強襲ヒットは米国でエラーであるなど興味深い比較が多くなされている。(川尻記)

◇中谷 巖著

「入門マクロ経済学 第2版」(日本評論社)

読者は、本書を通じて、単にマクロ経済学の理論体系の全体に触れるというだけでなく、日本経済の実態がどのようなものであるのかを、理論との関係を通じて知らず知らずのうちに理解できるようになるであろう。現代マクロ経済学の基礎を学べる良書の一冊である。(尾川記)

〈自 然〉

◇NHK取材班編

「NHK驚異の小宇宙・人体」(全6巻・別巻2)

人類にとって永遠の興味と関心の対象であるテーマ、第1巻：生命誕生、第2巻：しなやかなポンプ(心臓・血管)、第3巻：消化吸収の妙(胃・腸)、第4巻：壮大な化学工場(肝臓)、第5巻：なめらかな連携プレー(骨・筋肉)、第6巻：生命を守る(免疫)、別巻1：CG図鑑、別巻2：ビジュアル人体データブック。いづれもビジュアルな情報を現代のハイテク技術を駆使し、面白く、分かりやすく、あたかも人体の中を探検物語として驚きと感動のドキュメントに仕立ててある。(茶木記)

◇S.W. ホーキング著 林 一訳

「ホーキング、宇宙を語る」(早川書房)

車椅子の天才物理学者ホーキングが、宇宙の起源と運命に関する基本的観念を、空間と時間の問題を真正面に据えて、科学教育を受けたことのない人にも理解できるようにと数式は用いずに述べた本。彼が描き出す宇宙像は、空間的に果てがなく、はじまりも終わりのない宇宙。世界的なベストセラー上位本。(林記)

◇ペレツ著 山崎紀美子訳

「やさしい物理の話」(東京図書)

ブルガリアで科学関係のジャーナリストとして活躍する著者が、子供でも理解できるようにと、物理の広い分野にわたってわかりやすく面白く書いた本。これなら、物理ぎらいの人にも興味をもって楽しく読めるだろう。(林記)

◇C. キッテル著 宇野良清〔ほか〕共訳

「固体物理学入門 上・下」(丸善)

結晶構造に始まり、周期構造中の波の伝播、自由フェルミ気体やエネルギーバンド論等の基礎理論を詳しく解説した上で、物質の誘電的性質、弾性的性質、金属伝導、半導体、熱電氣的性質、超伝導、更には結晶の転位に至るまで物性と材料科学を学ぶ者にとって、その基礎となるべき内容がバランスよく盛込まれた名著である。(上浦記)

◇C. キッテル著 青野正和〔ほか〕共訳

「固体の量子論」(丸善)

今日の物性若しくは材料科学の発展に量子力学の果たした寄与は非常に大きなものがある。「固体物理学入門」の著者が、その続編ともいべき専門書として送り出したものであり、物性関係の論文に出てくる数式や内容と「固体物理学入門」との間を量子論の立場から埋めてくれる本である。(上浦記)

〈機 械〉

◇自動化技術編集調査会編

「やさしいセンサ技術」(工業調査会)

生産システムに使用されるセンサ45機種の原理、構造、機能、特性、使用法のほか、計測の考え方や周辺技術についてわかりやすく解説した書です。

(野原記)

◇片岡照栄〔ほか〕著

「センサハンドブック」(培風館)

センサの研究開発技術者やユーザーのため、センサの基本概念から、材料、素子、使われ方等センサのすべてを網羅した最新の書です。(野原記)

◇日本機械学会編

「流体計測法」(日本機械学会)

流体工学や流体機械における計測技術の発達近年めざましいが、レーザー流速計や熱線流速計などを含めた計測上の技術指導を行っている。(京免記)

◇会田軍太夫〔ほか〕著

「光学機器入門」(東海大学出版会)

技術が進歩して高精度を要求するようになるほど光学機器は有効になってくる。幅広く利用されている光学機器について、その基礎から応用までをわかりやすく解説している。(大下記)

〈電 気〉

◇新井 晃著

「センサーとはどんな技術か」(日本実業出版社)

センサーについての基礎知識、種類、利用法等、絵をふんだんに使って分かり易く説明されている。電気技術者ばかりでなく土木や建築の学生にも興味がわくよう、例えばコウモリやウナギのもつセンサーなど普段気付かないことにもふれていて大変面白い。

(若宮記)

◇飯高成男〔ほか〕著

「絵とき電子回路シリーズ 1～4」(オーム社)

文章と数式で埋まった本を見ると急性偏頭痛になるマンガ大好きな学生諸君!「絵とき電子回路シリーズ」は、残念ながらマンガではありません。しかし、2色刷でどのページにも写真や図があり偏頭痛に悩まされることは無いはず。ぜひ一読して下さい。

(綿井記)

◇ライネル・イエーガア著 野中作太郎〔ほか〕訳

「パワーエレクトロニクス 基礎と応用」(森北出版)

パワーエレクトロニクスとは、半導体を用いた電力の変換と制御を行なう技術をいいます。交流電子スイッチ、電力変換装置、電動機の可変速駆動など、今後ますます利用されるパワーエレクトロニクスを理解するための入門書です。(奥本記)

◇中前栄八郎著

「コンピュータグラフィックス」(オーム社)

この本は、コンピュータグラフィックスに興味を持つ学生で、これから勉強したい人達、ある程度勉強した人達に大変有用であると信じる。またこの本は、コンピュータグラフィックスの生いたちから、その華やかな開花と問題点まで、ハードとソフトの両面が通観できるため、大変楽しく読むことができる。(野村記)

〈土 木〉

◇本四国公団編

「瀬戸大橋上部工工事写真集」(海洋架橋調査会)

写真をみてまず興味をもち、さらに関心を高めて土木工学を勉強する学生としての目的意識と学習意欲を確固としたものにしましょう。長年の多くの土木・橋梁・材料・計算理論等の諸技術の積み重ねが本橋完成の土台になっていることを銘記して下さい。(丸上記)

◇岡 並木監修

「駅の新しい機能一広場化・情報化(上・下巻)」

(地域科学研究会)

これからの駅は、単に交通結節点としての機能だけではなく、都市の顔、市民の憩いの場として、コミュニティを育み、文化を生み出す空間でなければならない。情報化、高齢化社会を迎えるにあたって駅に要求される新たな役割と機能について、内外の事例を盛り込みながら解説している。(藤原記)

◇アーサー・ホームズ著 上田誠也〔ほか〕訳

「一般地質学 (全3巻)」 (東京大学出版会)

地球が生れて45億年。この間に大陸や山脈は誕生、移動、消滅、沈降、隆起をくり返して来た。その原因と発生のメカニズムをわかりやすく説明されている。写真や図表を眺めるだけでも役立ち、学ぶより楽しむ本である。(石井記)

◇吉澤孝和著

「測量作業の基礎知識」 (日本測量協会)

国家基準点の標高の決定、河川・道路、地盤沈下等公共工事に伴う測量、さらには建設現場作業等に、きわめて重要な水準測量作業について、多くの図や、さし絵を用いて解説した、わかりやすい実務書である。

(阿部記)

〈建 築〉

◇文・内田 繁 写真・稲越功一

「椅子の時代」 (光文社)

本書は、「J J」誌に連載された「一脚の椅子」を中心にまとめられたものである。我々の日常生活の中で最も身近な家具の一つである椅子を27点にわたり、美しい写真を用いながら、わかりやすく説明している。

(篠部記)

◇吉田光邦監修 田中一光・小池一子〔ほか〕構成

「JAPAN DESIGN」 (リブレポート)

日本の伝統的な工芸デザインから現代的な工業製品のデザインまで、様々の分野のデザインを「日本の四季」をテーマとしてまとめた本である。日本の自然、文化、歴史をもののデザインを通して学習できる。

(篠部記)

◇下村純一著

「薔薇と幾何学」 (平凡社)

ヨーロッパの近代建築を撮り続けている写真家、下村純一氏の著作で、写真はモノクロなので多少もの足りなさを感じるが、ヨーゼフ・マリア・オルブリッヒの「ルードヴィッヒ大公結婚記念塔」や、ル・コルビュジェの「サヴォワ邸」を含め、現存するヨーロッパの10の近代建築について、写真家とは言え、造詣の深いタッチで紹介している。(岡本記)

◇アンリ・ロワレット著 飯田喜四郎〔ほか〕訳

「ギュスターヴ・エッフェル パリに記念塔を建てた男」 (西村書店)

フランス革命 200年祭が、パリで行われたのは昨年ですが、今から 100年も前の 100年祭に、パリ万国博覧会が開催されて、その際に記念塔として建てられたのがエッフェル塔です。この塔は、当時の鉄骨造の技術を集結して、技師ギュスターヴ・エッフェルによって設計、構築されたもので、万国博後は壊される運命にあったが、紆余曲折の末、残され、現在ではパリの一つの名物になっている。この本はギュスターヴ・エッフェルの技師としての生涯を語っている。(岡本記)

〈共 通〉

◇「知的コンピュータシステム事典」 (産業調査会)

知的コンピュータシステムとは、「人間の知的活動をコンピュータによって実現するシステム」のことである。本書は、先ず人工知能の現状を、基礎から応用まで述べる。続いて、知的ソフトウェアの開発技術、実行技術、およびコンピュータシステムの実例などについて解説する。(鍋本記)

◇H. W. デブンポート原著

「胃はなぜ自分を消化しないのか」 (日経サイエンス社)

胃液はほとんど何でも溶かす強酸である。蛋白質である自分を何故消化しないのか。空腹時に薬を飲むとそのメカニズムはどう変化するか。肩のこらない本、30分で読める。移動中に読むのに最適。(竹村記)

◇飛田良文〔ほか〕著

「日本・中国慣用句対照辞典」 (南雲堂)

マレーシアに続き中国から留学生が来ることになった。留学生にとって言葉に早く慣れることが留学の成果をあげることにつながるため、本書を用意したい。

(藤井記)

◇竹内オサム・村上知彦 編

「マンガ批評大系 1~4」 (平凡社)

これまでに本や雑誌に載った、マンガの批評やマンガ家のエッセイ、技術論・作品論などマンガに関する様々な文章の集大成。日本のマンガ文化をその始まりの頃から考えるための入門書といえる。もうちょっと難しくマンガを考えてみたいと思っている人向き。(西名記)

海外だより

美しき西ドイツの 村と街

建築学科 篠部 裕

1. はじめに

昨年(2006年)の6月中旬から約2週間、西ドイツ南部のバイエルン州に農村調査に行ってきた。メンバーは、大学の先生、都市計画家などを含め6人であり、比較的小人数であった。調査の目的は、わが国と比較して農村整備が進んでいる西ドイツにおける農村整備の事例調査であり、現地3箇所の農地整備事務所を中心に、聞き取り調査、農村整備の現地視察等を行うというものである。

(1) 一路西ドイツへ

我々は賑やかな見送りを背に、一路西ドイツへと向かった。利用航空会社は、あのペレストロイカで有名なソ連の「アエロフロート」である。国営航空でもあり、サービスは「最悪」、スチュワーデスは「?」、機内食は非常食以下である。なんと、食後のデザートには、ビニール袋に入ったぶどうが配られるという様である。「狭い」「?」「まずい」の十数時間後、何はともあれ無事フランクフルト入りすることができた。あのソ連の航空機であれば、間違っても撃ち落とされる心配はない。しかし、利用航空会社としては今後検討する必要がある。

(2) レンタカーでの調査

今回の調査のスタイルは、レンタカーを借りて車でいろいろな農村整備をみて回るというものである。主な運転手はもちろん最年少の私である。外国旅行はこれまで数度あるが、現地での車の運転は初めてである。「車は右、車は右」という言葉を頭の中で繰り返しながら運転する。ウインカーを動かそうと思ってワイパーが動き出すこと数度。しかし、1日も運転すれば結構慣れてくる。慣れればこれらのもの。西ドイツのドライブは車も少なく道は広く実に快適である。アウトバーンで車を快適に飛ばす。しかし、我々の車はワゴン車でありせいぜい時速150km。隣りをベンツ、BM

Wが時速180~200kmのスピードで追い抜いて行く。

窓から見る西ドイツの村や街の風景が実に美しい。概ね村や街は中心に教会を置き、その周囲に各住宅が固まって建っているという構図である。この構図はどの村でも街でも変わらない。極めて秩序ある空間構成であり、スプロールした光景はここでは見られない。6月なのにこちらはまだ新緑が青々と美しい。菜の花畑が時おり見受けられる。何処までも続く丘陵からなる風景は日本の北海道のそれと少し似ている。

(3) 農家調査にて

農地整備事務所で紹介された農家をヒアリング調査して回るが、どの農家も説明熱心である。ドイツ人は皆説明好き。質問が少ないと少し物足りなさそうな顔をする。活発なやり取りの間にも、笑いがもれる。幸いにも今回の調査は贅沢な通訳付き調査ということで言葉による不自由は無かった。

どの農家もとても親切で、ヒアリングの後には牛乳やケーキなどのもてなしを受けた。このケーキが絶品で、苺と生クリームたっぷりのせた手作りのおいしいケーキである。恐らくアンアン・ノンノ族(今はオリブ少女?)にはたまらないケーキであるに違いない。西ドイツにおける豊かな食生活を満喫するとふとあのアエロフロートでの機内食を思い出す。ペレストロイカはソ連には必要であると再認識せざるを得ない。



生クリームたっぷりの
イチゴケーキ

(4) 楽しい夕食

1日の調査が終わると、いよいよ楽しい夕食の時間が訪れる。まずはドイツビールで乾杯。ビールの味には大きな拘りは持たない。出されたビールはどれも美味しい。ビールのつまみは本場西ドイツのソーセージである。焼いたもの、ボイルドしたもの、様々に調理されたソーセージを楽しむ。ビールを飲みながらの1日の反省会はなかなかのもの。

肉料理や魚料理を各々の好みに応じて注文する。私のお気に入りには、「コルトンブー」。肉とハムとチーズを挟んだカツレツである。日本のトンカツと比較すると味はかなり大味だがなかなかいける。こちらでの料理はどの料理もボリュームが恐ろしくある。一人前が日本の料理の軽く2～3倍はあるであろう。これが西ドイツサイズであろう。山盛りのフライドポテトやこぶきいもなどのポテト料理が必ず添えてある。魚料理は鱈などの川魚が多く、料理の味は日本の魚料理よりかなり落ちる。こう思うとやはり日本の魚料理は世界に誇れる料理である。



(5) 夜の散歩

約2時間程度かけたゆっくりとした食事が終わると、夜の街へと繰り出す。ここからは自由な時間である。夜の街の調査も大切な調査である。どの様な人々がどの様な場所で、どの様なくつろいだ時間を送るか。空間と生活は、建築を勉強する我々にとって永遠のテーマである。夜の10時くらいまではほのかに明るいので、疲れるまでは歩き回る。もちろん観光スポットも押さえて置く必要がある。ミュンヘンやフランクフルトなどの大都市では「夜の街」「楽しい街」がまとまっているのだが、我々が主に回った小さな街にはその様な所はなかなか見受けられない。健全なナイトライフに終始を徹することとなる。歩き疲れるとホテルにもど

り、シャワーを浴びて1日が終わる。

以上は、西ドイツでの農村調査の一コマであるが、以下調査や調査の合間をぬって見た西ドイツの「住まい」と「市民菜園」について少し触れてみたいと思う。

2. 西ドイツの住まい

ドイツ人の場合、衣食住の生活の中でとりわけ「住」が占める比重は高く、すまいに関しては我々日本人以上に重きを置いている。日本ではとにかく自分の家を持つ（持家）ということが、住生活における大きな目標とされている様であるが、西ドイツでは住宅の所有よりも、むしろ良い住生活を営むことのできる環境を形成し、維持していくことに大きな目標が置かれている。

西ドイツのすまいの印象を、我々が訪問（見学）した住宅を中心に農家住宅、戸建て住宅、集合住宅の3つについてまとめてみると以下ようになる。

(1) 農家住宅

農家住宅は基本的には、1階に居間・食堂・台所等の公的空間が配され、2階には寝室等の私的空間が配される。日本では主婦の空間とも言える台所が概して小空間にまとめられているが、ここでは何れもゆったりと採られているということが大きな違いであろう。日本ではとにかく台所が食堂と比較して小さめに造られがちであるが、我々の訪問した各農家住宅は、台所が食堂と同等または大きめに造られていた。居間や食堂については日本とほぼ同様かやや大きめの規模であり、居間には冬季の為に暖炉が配されている。また、庭先には夏屋外で食事出来るように、家族が座れる大きなテーブルが大きな庭木と共に配されてある。

個室については、我々が想像していたものよりも一回り小さめの空間で、日本的に表現するならば6畳～8畳程度の広さであった。これも冬の低温を考慮しての空間容積であろう。各部屋の天井高については、バーベントハムの約140年前に建てられたと言う古い農家は他と比較してやや高めであったが、他の住宅は我々が想像していたものよりもやや低めで、約220～30cm程度であった。

バンベルクの視察で立ち寄ったミステンドルフでは、古い農家住宅が改修されて売りに出されていた。聞けば、この様な古い住宅を改修する場合、改修費用の30%が市から補助されるらしい。日本でも伝統的町並み

をもつ特定の地域では、町並み保存の為に一部の改修費用の負担がある。しかし、これと言って変わらない普通の村でもこの様な補助制度が設けられていることは、農村の伝統的景観を維持すると共に農村に都市部の人を新たに居住させる為の大きなボーナスとなっている。

(2) 戸建て住宅

日本の新興住宅団地のように妙に様々な建築様式を取り入れた無秩序なデザインの戸建て住宅はない。ある程度デザインが統一された戸建て住宅が連続して建てられている。各住宅の構成は、概ね地下1階地上2階の3層構成となっている。日本と大きく違うのは住宅においても地下室が設けられている点である。

この地下室は主に暖房機械及びそれに伴う燃料置き場や倉庫関係に使われている。1階は前述した農家住宅と同様に、居間・食堂・台所等の公的空間が、2階には寝室等の私的空間が概ね設けられている。

これらの住宅の窓辺には、フラワーポットに植えられたきれいな花が置かれ、住んでいる人のみならず我々旅行者の目を楽しませてくれる。私は現地を訪れるまではこれらの窓辺の花飾りはきつと一部の観光地でのやらせだと思っていたがそうではなく、どんな村や街でも窓辺がたくさんのきれいな花で飾られていた。



窓辺の花飾り

庭についてはどうであろうか。日本の場合都市郊外の住宅地においても、地価高騰の関係で猫の額程度の庭しか持てないものが多いが、こちらでは芝生が広々と植えられたゆったりとした中庭が設けられている。定期的な芝刈りはもちろん必要であるが、日本のように多くの雑草・害虫から庭を維持するという手間はこちらでは少ない。

アメリカの場合この様な郊外の広い庭付き住宅では、プールなどが設けられているものが比較的多いが、こ

こ西ドイツではプールを使う期間は年間を通して極めて少ない為、プールを設けてある住宅は特別なケースを除きない。その代わりに、各住宅の前庭には日光浴のためのサンチェアとパラソルが多く見受けられる。日本の場合、差し詰め物干し竿がこれらに代わって置かれているのであるが、洗濯物をこの様に人の目につく中庭等に干すことは西ドイツでは禁じられており、屋根裏部屋や裏庭の目立たないところに洗濯物は干されている。この様な洗濯物一つをとって見ても、美しい住宅地景観を形成するために、細かな気配りが行われている。

また、日本の場合住宅の前庭はブロック塀などで囲いこまれるものが多いが、こちらの住宅にはブロック塀なるものは一切存在しない。その代わりに個々にデザインされた個性ある木製の垣根や門や低く造られた生き垣が存在する。従って、これらの垣根や生け垣を越しにきれいに整えられた各中庭が誰でも容易に鑑賞でき、各個人単位の前庭がセミパブリックスペースとしても機能している。この様な住宅地の道路を歩いていると、さながらガーデン・ショーにでも来た様な氣にいつの間にかさせられる。また、住宅は単に個人の為のものではなく、みんなの為に寄与するものであるということを改めて考えさせられる。

(3) 集合住宅 (団地)

各住戸のバルコニーには多くの植物が植えられ、戸建て住宅の窓辺の花飾り同様に、緑豊かな表情が集合住宅のバルコニーにも見られる。日本にみられる洗濯物や布団干しの団地風景はここでは見られない。

また、各住棟の足まわりに設けられた中庭・公園等の公共スペースは十分な広さをもち、前述した戸建て住宅のバルコニー同様に多くの樹木が植樹されている。隣棟間隔も十分あり、各住棟がゆったりと配置してあ



団地内の緑豊かな公園

る。これらの公共スペースには児童公園等が設けられているが、遊具は何れも木で造られているものが多く、児童が親しめるように柔らかく暖かい木の素材感が生かされている。日本に見られる鉄やコンクリートを素材とする無機質な遊具とは大きな違いを有している。

ゴミ等の回収については、ゴミの収集日に各住戸がごみ箱（ポリバケツ）を道路沿いに出すようなシステムも見られ、日本のようにゴミ収集場所にゴミが無責任に山積みされる様な光景は見られない。また、収集場所が設けられている場合には、ゴミ収集場所の周囲には樹木が配されるなど景観的な配慮が十分なされている。



ビンの回収箱

ビールやワインの消費が多いということも関係して、これらの空き瓶の回収・処分方法も、瓶を茶色、白色、緑色の3色に分けて瓶の色毎に回収し、できるだけ容易に（費用のかからない様に）瓶のリサイクルが出来るような工夫がなされている。この様なことは我々日本人にはとても信じられないが、ルールを守る厳格さをもち生真面目な性格のドイツ人にはどうやらそれが可能の様である。

3. クラインガルテン（市民菜園）

庭付きの家に住めない集合住宅居住者などには、都市内或は都市郊外に「市民菜園」がきわめて安い費用で貸し与えられるようになっている。

クラインガルテンとは、直訳すれば「小さな庭」であり、市民が利用できる小規模の庭を意味する。その規模は様々であるが、少なくとも日本のミニ開発によって造られた戸建て住宅団地の一区画よりは大きいようである。これらは、各住宅から概ね30分から1時間以内の距離にあり、主に週末の土曜・日曜などの休暇を利用して、維持・管理されている。

我々が訪問したミュンヘン中心部より南東に位置するファサンガーの市民菜園は60年の歴史を持つ伝統のある市民菜園であった。古くは森であった所をゴミ処理場や採砂場に利用していたが、その後は現在の市民菜園に至っている。この市民菜園は全部で100区画からなっており、一区画は概ね200㎡のものと300㎡のものがある。賃借料は300㎡のもので年間300DM（日本円で約22,500円程度）である。

市民菜園は基本的には、区画の各々半分を野菜と花に利用することになっている。区画内には野菜や花を栽培するための道具を入れる小屋も設けられている。これらの小屋は本来は農具を収納する倉庫として建てられたものであるが、現在では多くの場合これに簡単な居間やトイレ或いはキッチン（もちもんビールクーラーまである）等が設けられており、ちょっとした別荘としても機能するようになっている。規則では市民菜園内に寝泊まりしてはいけないことになっているが、週末にはここで寝泊まりして花や野菜などの作物を栽培している者も多いようである。

これらの小屋は6タイプからなり、その規模は概ね3m×4m程度のものである。我々の訪問したアルフレッド氏は、2年前に約4万DM（約300万円）かけてこの建物と農具を購入したそうであり、りっぱな建物が造られていた。

この様な市民菜園の維持・管理は、基本的には各個人単位で行われているが、市民菜園全体の運営や利用者の交流を目的としたクラブも組織されている。クラブの運営に関しては、6、7人からなる代表者の会議が2カ月に1回の程度で行われ、市民菜園の維持・管理に関わる様々な事が話し合われるようになっている。

各市民菜園にはクラブが造ったレストランがありビールを飲みながら、クラブの会議がもたれたり、市民菜



市民菜園に設けられたゲート

園仲間が交流できるようになっている。

クラブの活動で忘れてはならないのが、一年に1回開かれる市民菜園の大会である。これは、各市民菜園単位に代表者を出して、菜園の美しさや内容を競うものである。ただ単に一個人の趣味の範囲に留まるのではなく、各々が競い合うことでより美しい充実した菜園が形成されるような工夫がなされている。各市民菜園は生け垣や垣根で囲まれ、菜園の入口には薔薇などで飾られた美しいゲートを設けたものが多く、その美しさには目を見張るものがある。

4. おわりに

今回の約2週間の調査を通して、我々日本の生活環境をみると、確かに日本の生活環境は便利に整備はされているが、豊かに整備されていないという事に気づく。自然豊かな美しい村と街が続く西ドイツの風景とゴチャゴチャとした日本の農村と都市の風景を比較すると大きな開きを感じる。何が、どのような環境が我々の生活にとって最も大切なのか、必要なのかを我々日本人は、戦後の豊かな日本経済の中に見失っている。ペリーが黒船で初めて日本へ来た時、彼はその美しい日本の農村の風景に大変感動したと言う。

かつての日本の美しい風景・豊かな環境を、一人一人の市民がこれから再び築いていく必要がある。

夜間利用者の声

放課後ちょっと 図書館で……

4 E 殿川 雅也

前々から図書館の利用時間について、非常な不満を持っていました。平日は夕方の5時に閉まるので、昼休憩と放課後のわずかな時間に、必要な本を探して借りることだけしかできませんでした。特にクラブで忙しい人には図書館を利用するのが難しかったです。まして土曜日には昼には閉まっていたので、これでは休館日と変わらないと思っていた人も多かったはずですよ。

今年から夜間利用が始まり、平日は8時まで、土曜日には4時半まで図書館が利用できるようになりました。これで放課後ちょっと図書館で調べ物をしたいと思っても図書館は開いているし、レポートを書くことだってできます。ずいぶん助かります。ゆっくり小説を読んで過ごすこともできます。とにかく大分楽になりました。

時間外開館のおかげで

3 E 吉富 隆

その昔(?)、まじめにレポートを提出しようとがんばっていた頃、実験が終わって資料を探しに図書室へ行くと、「閉館」の札が外の明かりにハッキリと見えていて、

「もう少し長く開いていれば……」

と、思ったことが何回かありました。

そうして、去年から時間外開館が始まりました。

おかげで、図書館が勉強にすごく役立って……いるわけがなく、おしゃべりに花を咲かせたりしています。

しかし、資料を求めて呉や広島の図書館を巡る必要もなくなり、図書館で勉強するとはかどります。

そのうえ、冷暖房完備の居心地、もしくは、寝心地のよい休憩所として、また、井戸端、ではなく、図書館会議の場として、などと勉学とは程遠い方向に活用しています。

○「図書室では静粛に」

○「読んだ本はもとの位置へ」

○「帯出期間を守ろう」



○「図書室での飲食はやめよう」

○「脱いだスリッパはゲタ箱へ」

お知らせ

◆「フランク・ロイド・ライト全集 全12巻」

一故・清教授ご家族から寄贈◆

昨年8月にご逝去されました清和四土教授（建築学科）のご家族から、下記の通り「フランク・ロイド・ライト全集 全12巻」（エーディーエー・エディタ・トーキョー刊）をご寄贈いただきました。厚く御礼申し上げます。受入・整理が済み次第開架図書室に備え付けの予定です。大いにご活用ください。

◎FRANK LLOYD WRIGHT 12 vols.

(Edited and Photographed by Yukio Futagawa/
Text by Bruce Brooks Pfeiffer, 安藤正雄 [ほか] 翻訳)

〈内容〉

現代建築に多大な影響を与え続けた巨匠ライトの膨大な作品を通史というかたちで編集した世界で初めての作品集。ライト・ファンデーションの全面的な協力と20数十年にわたる実施作品の撮影によって初めて可能となったこの全集は、ライトの空間の本質を捉える上で必要不可欠な資料となろう。

第1巻から8巻のモノグラフは、多数の写真と図面により構成され、プロジェクトを含め1,000を越える作品の大部分を網羅。第9巻から11巻のプレリミナリー・スタディは、特に重要な作品の設計過程を明らかにするため、今まで発表されることのなかったスケッチ、ディテール等を含めた図面によって構成し、実施に至るまでの経緯を明らかにした図面集。第12巻のレンダリングは、芸術作品と呼ぶに相応しい雰囲気備えた独特の透視図を中心に、70余年にわたる成長と発展の過程を凝縮したドローイング集。

◆書庫増設が完了◆

前号でもお知らせしました図書館の書庫の増設工事が終了し、2月下旬完成いたしました。

今回増設分は主に電動式集密書架で、幅90cm棚に換算して約1,300棚分です。図書館では、今後現書庫内図書の整理・移動、長期貸出図書（学科）の返納受付と作業を進める予定です。宜しくご協力ください。

◆時間外閲覧（夜間開館）実施◆

図書室では、平成元年4月11日より、下記の通り時間外閲覧（夜間開館）を実施しています。（担当者は、橋田さん・浄泉さんの女性おふたりです。）

1. 趣旨

本校図書室では、開室時間を延長することによって学生の学習意欲及び学力の向上と教養の深化を図り、教職員の教育研究活動の進展に資するため、時間外閲覧業務（以下「夜間開館」という）を実施しています。

2. 夜間開館時間

平日 17:00～20:00

土曜日 12:30～16:30

ただし、次に定める日は実施しません。

(1) 学則に定める休業日

(2) 学校行事等により授業が行われない日

3. その他

夜間開館中は、必要に応じ冷房又は暖房が行われます。学生諸君においては、夜間開館を大いに利用して勉学に役立ててください。

時間外閲覧（夜間開館）利用状況（21号の続き）

	10月	11月	12月	1月
〔開館日数〕	25日	20日	19日	20日
〔入館者数〕	373人	538人	905人	614人
〔一日平均〕	(14.9)	(26.9)	(47.6)	(30.7)
〔貸出冊数〕	161冊	246冊	165冊	230冊
〔一日平均〕	(6.4)	(12.3)	(8.7)	(11.5)

編集後記

第22号をお届けします。今回も多くの学生・教官の皆様から原稿ならびにご協力いただき、ありがとうございました。

3月・4月は個人的にも、また学校全体にとっても非常に変動の多い、節目の時期です。何より元気に、張り切って新たな出発をしたいものです。

お知らせの通り、故・清和四土教授のご家族から「フランク・ロイド・ライト全集 全12巻」をご寄贈頂きました。他の図書と同様、大いにご活用ください。
(西本記)